

新たな真相解明に向かって (Part 2)

堂 本 彰 夫

2021 年 11 月

<連絡先>

ホームページURL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒gakuyou17@outlook.jp

目 次

- ⑪ 「カモ（鴨/賀茂）族」と「ワニ（和邇/和珥）族」の関係及び、その出自?!
..... 1
- ⑫ 改めて、「倭国大乱」は、全国規模で起こっていた?!
..... 4
- ⑬ 「奴国」「伊都国」、そして「邪馬台国（連合）」の関係は?!
..... 7
- ⑭ 改めて、「安曇族」とは何か?!そして、「隼人族」との関係は?
.....10
- ⑮ 「製銅・製鉄族（山の民→山つ霊→山祇_{やまつみ}）」と「海人_{あま}族（海の民→海つ霊→海神_{わたつみ}）」の相剋と建国?!
.....13
- ⑯ 敢えて、「高天原神話」の構図?を描き出してみると?
.....16
- ⑰ そこに、「天智系（筑紫倭国?）」と「天武系（豊国倭国?）」の関係が投影されている?!
.....19
- ⑱ 歴史（「記紀」）を操作した（最初に創った?）のは、「息長氏」と「秦氏」?!
.....22
- ⑲ それを、集大成（改竄/剽窃?）したのが藤原氏（不比等）?!
.....25
- ⑳ 改めて、「ヤマト建国」の真実は、どうなっていたのか?—その1—
.....28
- ㉑ 改めて、「ヤマト建国」の真実は、どうなっていたのか?—その2—
.....31

⑪「カモ（鴨／賀茂）族」と「ワニ（和邇／和珥）族」の関係及び、その出自?!

さて、ここでは、⑩の続きとなるが、初期ヤマト王権（プレ三輪王朝?）の中心（結び役?）となったのが、「カモ（鴨／賀茂）族」ではなかったかということであるが、一方で、その「カモ（鴨／賀茂）族」は、その後の推移において、王権の参画者?という面（→皇別・吉備鴨氏／神別・天神系賀茂氏）と敵対者?という面（→神別・地祇系賀茂氏）に分かれていった（二つに分かれた?）?!

端的に、そういうことではなかったか?ということであるが、その理由（原因）は、おそらく、後から?近畿に進出してきた「（吉備を經由した?）饒速日勢力」（物部氏?→ただし、それは、直接的には饒速日の子の「ウマシマジ（デ）」勢力か?）が、別の勢力と組んで、「賀茂・三輪（大物主＝龍蛇神信仰）勢力」を駆逐した（裏切った?）?!そして、その「饒速日勢力」が、纏向に、新たな「前方後円墳勢力」を形成した（→纏向祭政都市）?!もちろん、その勢力とは、「ワニ（和邇／和珥）族」（意富／多氏→前方後円墳勢力?）から離反した「天香具山（高倉下^{たかくらじ}→尾張氏）族」である?!

要するに、「カモ（鴨／賀茂）族」は、大和建国に関わった中心勢力・氏族ではあったが、その流れ（動き）は、「記紀」（→「新撰姓氏録」）からすれば、まずは「皇別」としてスタートし、そして、そこから、「神別」の「天神系」と「地祇系」に分かれたということである?!そして、その顛末?が、おそらく「カモタケツヌミ（八咫鳥）系」と「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）系」、そして、「事代主神（恵比寿様?）系」の関係ということになったということである?!

すなわち、吉備から大和葛城に移動してきた「カモ（鴨／賀茂）族」は、まずは、後に山背（城）に向かった「賀茂県主系（カモタケツヌミ系）」（こちらは、その後当地で、「秦氏」や「息長氏」と組んだことは間違いない→上賀茂神社・下鴨神社!）と、葛城に残った「賀茂君・朝臣系」（→高鴨神社・八重事代主神社等）に分かれた?!そして、その後、後者は、何らかの理由で、さらに「アジスキタカヒコネ系」と「事代主神系」に分かれた（多分?「事代主神系」の方が、「三輪氏族（大物主神系）」となった?!）?!

ちなみに、「三輪氏族（大物主神系）」に属する「地祇系」の賀茂氏（→「葛城賀茂氏」）は、第10代天皇「崇神」の時に登場してくる「大田田（多直^{おおただ}?）根子」の孫「大鴨積^{おおかもつみ}」を始祖とし、奈良盆地の西の「葛上郡鴨」（現在の奈良県御所市）を本拠地としたとされるが、これは、「三輪氏族（大物主神系）」と「カモ（鴨／賀茂）族」が、「ワニ（和邇／和珥）族→大（多）氏」を介して、大和葛城で合流・合体?したということではなかったか?!

もし、そうであれば、そこで、新たに頭を擡げてくるのが、彼ら「吉備」の勢力、すなわち「カモ（鴨／賀茂）族」と「ワニ（和邇／和珥）族→大（多）氏」の関係であり、改めて、その彼らの出自（出身地）が、どこであったのかとい

うことである？そしてまた、その、彼らの「吉備での居住」が、いつ、どのようにあったのかということである?!何故なら、彼らが、「吉備」に居住していたことは明らかであるが、彼らが、その時期までに、どこかからか移動してきたことは間違いないからである（例の「楯築墳丘墓」の造営が2世紀後半？とされているので！ただし、それは、3世紀後半以降ともされている?）?!

そこで、改めて、彼らは、どこから移動してきたのか？それは、当然？九州、しかも、南部九州（日向）と北部九州（岡＝遠賀、否、ひょっとしたら糟屋郡阿曇地区?）の双方からということになる?!そして、それが、例の「神武東征」の話（造作）に投影されている！（→「宇佐」で合流して、「記紀」での年数は違うが、一時期、「吉備」に滞在している!）?!

ちなみに、その合流部族集団が、「崇神」→「垂仁」期に示されている「和珥」「阿倍」「中臣」「物部」「大伴」各氏の祖達であろう（「紀」では、和珥臣氏の祖・阿倍臣氏の祖・中臣連氏の祖・物部連氏の祖・大伴連氏の祖の5人が、垂仁朝で「大夫まえつきみ」と呼ばれていたとする!）?!

しかしながら、もしそうであれば、そこに「カモ（鴨／賀茂）族」の名がないのは、ちょっと変である？ひょっとしたら、「カモ（鴨／賀茂）族」は、例の「ナガスネヒコ（長脛彦）」に見立てられた？勢力であり、大和で、物部氏（直祖ウマシマジ（デ））に疎んじられたからかもしれない?!ただし、こちらは、「アジスキタカヒコネ系」の「鴨族（賀茂氏）」であり、もう一つの「カモタケツヌミ系」の「鴨族（賀茂氏）」は、「八咫鳥」として尊重されている?!

いずれにしても、逆に、ここでは、その「カモ（鴨／賀茂）族」が「吉備」からの勢力の中心であり、彼らは、当の「神武」集団に見立てられた？だから、件の「大夫」には名前がない？実は、そういうことであつたのではないかということである?!故に、大胆な仮説（空想?）となるが、私は、件の「カモタケツヌミ（「八咫鳥」）」が、「神武」のモデル（ダミー?）だったのではないかと、秘かに睨んでいるわけでもある（彼は、日向の「襲そ」の出身という話もある?）?!

ただし、ここでは多少話は飛ぶが、大和（橿原）で「神武」の皇后となつた「媛ひめた踏た鞆たら五十鈴いすず媛ひめ命」の母親は、三輪山（「大物主神」）を祭祀する巫女だつたと思われる?!そして、その婚姻は、「神武」（カモ（鴨／賀茂）族?）が、大和の出雲勢力（「大物主神」→「事代主神」系）と合流・合体?したことを物語っている?!そして、他ならぬ、その皇后の出身が、製鉄（踏鞆たたら）と深い関係があつた氏族（出雲族?）だつたということになる?!

一方、その後、「吉備」の（を經由してきた?）「饒速日」（物部?）勢力（後から来た?「伽耶」勢力?太陽信仰族?→後の「崇神」に投影?!）が、先住の「葛城勢力（鴨族）」（「事代主系」と「アジスキタカヒコネ系」）を分断?させ（逆に、この時点で、両系統が出雲と結びつけられたのかも?）、「饒速日」の子の「ウマシ

マジ(デ)」が、「大和王権」(「物部氏族」の政権?)を確立させたということでもある?!だから、「賀茂県主系」は、山背(城)に向かった(逃げた?)?!

とにかく、「吉備・出雲勢力」の先住・先在によって、近畿大和の実態(実体?)はつくられていったと考えられるが、その「吉備・出雲勢力」とは、本当は、北部九州から先に移動・進出していた伽耶・新羅系勢力(倭人)とも考えられる?!「記紀」(「神武東征譚」)からの類推(妄想?)は、2世紀末の「倭国大乱」と、その後の「手焙形土器(前方後方墳)勢力」の近畿大和への集結と全国への進出、そして、その中からの「前方後円墳勢力」の出現という形で後付けされるということである?!

ということで、ここでは、ここが最重要となるが、こうした動きにおける、半島からの渡来人(彼らも「倭人」!）、具体的には、伽耶・新羅(一部、高句麗からも?)、そして百済系の各勢力の九州進出、そして、近畿大和への移動、そうした動きが、これらと、どのように関わっていたのかである?!端的に、彼らが、誰(どこの勢力)と、どのように組んだのかということであるが、結果的に、九州と近畿大和の並立(→最終的には、百済の「檀魯制」の反映?!)を実現させたということでもある?!

とは言え、かの神武が、BC660年に初代天皇に即位したということであるが(もちろん、それ自体は嘘であるが!)、どうもおかしいのは、彼の入和(東遷)の前に、「饒速日」という人物が先に大和入りしており、しかも彼は、現地の?豪族「ナガスネヒコ」に気に入られ(彼の妹を娶り)、王として君臨していた!そしてまた、一方では、出雲系の「大物主」も大和入りしていた!実は、この辺りを、どう整合化させるのかが問題であったわけである?!

しかしながら、それは、2~3世紀頃の大和の実態を表しているものではあるので、実際上は、それは、「神武」と「崇神」、そして「ナガスネヒコ」と「饒速日」の関係を示しているものとも考えられ、しかも「ナガスネヒコ」と「饒速日」の関係は、実は「カモ(鴨/賀茂)族」と「饒速日」の関係を示している?!つまり、饒速日の前に、ナガスネヒコが居たということであるが、そのナガスネヒコが「カモ(鴨/賀茂)族」のことであれば、その「カモ(鴨/賀茂)族」を取り込んだのが「饒速日」、実は「崇神」であったということにもなる?!

ただし、「記紀」は、物語としては、両者の関係/動きを別の時代に設定しているので、便宜上(論理上?)、最初の「カモ(鴨/賀茂)族→カモタケツヌミ」を初代「神武」とし、「饒速日」を、第10代の「崇神」としたわけである?!だから、二人とも、「ハツクニシラス・スメラミコト」としたわけでもある(事実上は、「崇神」であろうが?)!もちろん、その間に、いわゆる「欠史8代」の話の挿入しているわけであるが、しかし、それは、別な意味では、重要な「史実(先史?)」ではあったのである?!

⑫ 改めて、「倭国大乱」は、全国規模で起こっていた?!

さて、そのように捉えれば、年代的な不整合はあるものの（造作・捏造されているのであるから、それは、ある意味当然ではある?）、初期大和王権（プレ三輪王朝?）における人物／部族集団の集散離合の実態（実体?）は、これによって、かなりスムーズに理解されることになるわけである?!ただし、そこでは、かの「出雲」や「大物主（三輪氏）」の関わりも、改めて見直さなければならぬ?そして、それが、改めて、第10代「崇神」（二番目、実質は一番目?の「ハツクニシラス・スメラミコト」!）と、どのように関係してくるのか?そこが、初期大和王権（プレ三輪王朝?）の真相となってくるのでもある?!

そこで、その初期大和王権（プレ三輪王朝?）の真相、つまり「吉備（→出雲?）」からの諸氏族・勢力の大和への移動・進出、そして、彼らの離合集散のプロセスであるが、それらが、まさしく2世紀末の「倭国大乱」によって惹き起こされたものということであれば（そう捉えると?）、謎の古代史の全体像、少なくとも初期のそれが、かなり明確に示せることになる?!もちろん、かの「邪馬台国（連合）」のことも含めてである?!

ただし、その「邪馬台国（連合）」自体は、その「倭国大乱」によって出現したことは、おそらく間違いないことであろうから、問題は、その大乱が、いわゆる北部九州内（「奴国」を盟主とする「初期倭国」?周辺諸地域を含む?）でのそれであったのかどうかということである?!一般には、北部九州内での争乱であったと受け止められているかもしれないが（例の「魏志倭人伝」によれば、そのようにも解釈される?）、実はそうではなく、その動乱は、まさに全国規模で起こっていたのではないか?!

しかも、これについては、藤井耕一郎氏のアプローチによって明らかにされている、西日本、否、東日本をも巻き込んだ、「吉備」から進出していった「手焙形土器勢力＝前方後方墳勢力」の、「銅鐸／巴形銅器＝環濠集落勢力」への進攻と連動しているのではないかということである?!そこで、もし、そうであれば、そこには、少なくとも二つの新たな疑問（解明課題）が、新たに生じてくることになる?!

一つは、それが、「何故、起きたのか?」、そして、もう一つが、「何故、『吉備』からのものと関係しているのか?」ということである?!ちなみに、それは、直接的には、いわゆる「鉄器の保有・分配」に関わる、「吉備の不満／反乱」が横たわっていたということは、当時の考古学的状況からも明らかであろう（当時は、吉備は、「鉄器」の欠乏地域であった?「青銅器」も?）?!

しかしながら、最終的には、その「吉備」が、まずは「出雲」に進出し、そして抱き込んで（これが、「出雲の国譲り」の直接的なモチーフとなっている?）、「吉備・出雲連合軍?」として、近畿・越・東海、そして関東へと動き、一方

で、その一部（「神八井耳」勢力→「多氏」）が、西日本、とりわけ九州にも進出し（「吉野ヶ里（遺跡）」への進攻！そこに、征服の証し？としての「前方後方墳」を造営している！）、おそらく？「邪馬台国（連合）」の出現に、大きく関与した？！

であれば、そこで「共立」された女王である「卑弥呼」、そして「台与」の登場は（「魏志倭人伝」による！）、そうした「倭国大乱」の結果（直接的な影響？）を反映したものであるということになる？！そういう意味では、これまでの諸説を、大幅に見直さなければならなくなるわけでもある？！

しかも、これについては、そもそも、その「吉備」の勢力とは、どのような勢力であったのか？そして、彼らは、いつ頃、どこから、どのように移動していったのか？という、次なる疑問（解明課題）を呈することにもなるわけである（朝鮮半島や中国大陸から、直接渡来してきたとは考えられない！）？！

とまあ、これまでは、このように考えてきたわけであるが、実は、改めて捉え直してみると、「倭国大乱」自体は、2世紀末（180年前後？）には、一応収束？していたのであり、しかるに、私が、そのことを指していると思っていた、「吉備」からスタートした「手焙形土器（前方後方墳）勢力」の全国展開は、その「倭国大乱」と前後して（と言うより、むしろその後？）の動きとなるので（170～250年頃？）、それ自体は、いわゆる「倭国大乱」ではないことになる？！

ということは、その「手焙形土器（前方後方墳）勢力」の全国展開は、おそらく、その「倭国大乱」の結果生じた動き？だということにもなるわけである？！つまり、それは、改めて、（北部九州内の）「倭国大乱」が引き金となったのではないかということでもある？！

要は、先に「（北部九州内の）倭国大乱」があったということであるが、では、改めて、そうした理解を下に、北部九州内での動きを再考してみると、例えば、その「倭国大乱」とは、初期倭国覇権者？の「（倭）奴国」を、隣の「伊都国」が、「どこかの国（勢力）」と組んで弱体化させ、当時の倭国（「漢倭奴国」）の状況を一変させたものだったのではないか？！

そして、それが、これも例えば、107年に後漢に朝貢した「帥升すいしょう」王達の動きだったのではないか（彼らが、160人の「生口せいこう（奴隷）」を連れていったということは、どこかとの戦いの勝利によって、それができたということである？）？！ただし、それではなかったとしても、その「（倭）奴国」の衰退そのものは、考古学的にも確かめられるという（「須玖すく岡本」遺跡等の状況）！やはり、そこには、大きな勢力上の（政治的な）変化があったということである？！

とは言え、それは、とても、単独の国（勢力）が「（倭）奴国」を弱体化させたとは考えられない？！やはり、そうであれば、その後（2世紀末以降？）、例の「邪馬台国（連合）」が出現してくるわけであるので、その「どこかの国（勢力）」とは、当然？「邪馬台国」自体となるわけである（しかも、その連合を、伊都国

に常駐する「一大率いちだいらつ」によって維持させている？そのように、理解されるのである？)?!

そこで、改めて、その新興？勢力の「邪馬台国」であるが、先に述べた、「神八井耳」→「多氏」の勢力とは考えられないだろうか？彼らが、九州にも進出し（「吉野ヶ里（遺跡）」への進攻！そこに、「手焙形土器（前方後方墳）勢力」の進出（征服？）の証しである「前方後方墳」を造営した？）、その後の「火（肥）の君」「阿蘇の君」「大分の君」、そして「筑紫の君」の祖ともなったということであるので、その史実？には、かなりの蓋然性があるということにもなる？!

ということで、もし、そういうことになれば、その「多氏」（「神八井耳」勢力）が、いつ頃、どのようにして、北部九州（中部かも？）に入り、一方で、「伊都国」勢力と、どのように出会い、協力関係をつくっていったのかということが、解明されなければならない?!そしてまた、一方では、旧来の「(倭)奴国」勢力が、それにどのように対処し、そして、全国に（朝鮮半島にも？）散らばって（逃げて？）いったのか？その辺りが注目されることにもなるということである?!

ちなみに、その場合は、件の「倭国大乱」は、やはり北部九州でのそれということになり、170年頃からの、吉備の「手焙形土器（前方後方墳）勢力」の全国進出（征服？）は、その波動（余波？）によって惹き起こされたものと考えなければならない（なお、おそらく、瀬戸内海沿岸の「高地性集落」の出現は、それと連動している？）?!

ただし、件の「伊都国」の、旧来の王族自体（の一部？）も、「奴国（王族）」とともに、新しい勢力によって、各地に散らばりを余儀なくされたのかもしれない（和歌山紀ノ川沿い、あるいは伊勢湾岸への移住等！直接には、「朱丹」を求めて！その双方には、いわゆる「伊都（イト・イツ・イセ？→伊勢・志摩）」がある！）?!

そして、これについては（今はまだ、単なる着想だけの段階であるが！）、その過程において、「太陽信仰族」と「龍蛇神（ワニ？）信仰族」が、「吉備」で合流（合体？）し（それが、多分「海神（龍／ワニ神）」と「カモ（鴨／賀茂？）」の関係として、「記紀」に記された?!）、「手焙形土器（前方後方墳）勢力」となり（「出雲」を経て「近江」で?!）、その一部が、西（九州）へも向かった（戻った？）?!それが、上述の「多勢力（→「神八井耳」勢力の一部）」ではなかったか?!

であれば、彼らの進出による新興「邪馬台国」は、「伊都国（勢力）」と組んで、「邪馬台国連合」（「親魏倭王」の国）を確立させた?!ちなみに、その「伊都国（勢力）」とは、「加也かや山」周辺に移り住んできた「伽耶・新羅勢力」で、彼らは、「素戔鳴命」（ないしはその子とされる「五十猛いたける命」）を祖としている（『書紀』には、後の「怡土いと県主五十迹手いとて／伊蘇志いそし」は、彼らを祖としていたという）?!

⑬「奴国」「伊都国」、そして「邪馬台国（連合）」の関係は?!

ということで、ここでは、改めて、「奴国」「伊都国」、そして「邪馬台国（連合）」の関係はということになるが、その前に、前述の「伊都国」においては、後の「怡土いとと県主五十迹手いとて／伊蘇志いそし」は、一方で、自らを、「高麗こまの国の意呂おろ山に、天より降り来し日杵ひぼこの裔苗あと」としていたらしい（『筑前国風土記』より!）?!

ならば、その「日杵」とは、かの「天日鉾（矛）あめのひぼこ命」のことかと思われるが（ただし、その天日鉾（矛）は、最終的に、但馬の出石に本拠地を構えているので、その解釈は、かなり複雑とはなる?）、いずれにしても、「伊都国」には、代々「国王」がいて（その考古学的証拠は、当地の王墓群の存在に見られる!）、「奴国」と共に、対外交易で覇を競っていたことは間違いない?!

しかしながら、その「伊都国」が、例の、2世紀末（AD180年頃）の「倭国大乱」を経て、新興国家「邪馬台国」と組んで?、連合（新たな倭国）の玄関口（人・物資の通用口）の役割を果たしていた（「一大率いちだいそつ」の常駐等）?! これは、どう見ても、新興国家「邪馬台国」の一方的な進出の結果ではなく、双方の合意によるものと考えられるわけである?! だからこそ、かつての大国「奴国」の覇権を奪うことも出来た?!

しかるに、それ以前のAD57年に、後漢王朝から「漢委（倭）奴国王」の印綬（金印）を貰った「奴国」（の王）であるが、その後の「邪馬台国（連合）」の出現に際しては、そこの王の存在自体は影が薄くなっており（人口は多いが!）、構図としては、「邪馬台国」と「伊都国」の新たな紐帯?が、大きな力を有していたと考えられる?!そして、その紐帯の確たる証しが、かの「一大率」の伊都国常駐ではないかということである?!

ちなみに、「伊都国」は、繰り返しになるが、「加也山」周辺（糸島半島西部）から、「三雲」を中心とした糸島平野の中央部に、その拠点を移しているようである。そこでは、弥生時代中期後半から終末期にかけて「厚葬墓こうそうぼ」（王墓）が連続して営まれており、それが「三雲南小路遺跡」「平原遺跡」等であり、また、その中の「井原鍬溝やりみぞ遺跡」は、遺物の点から「將軍墓」の可能性が高いとも言われているのである?!

ところで、これも先の、107年に後漢奉獻を行った倭国王「帥升」（等）であるが、彼が「奴国王」であったのか、それとも別の国の王であったのか（「倭面土わめんど→やまと?国」の王とも記されているが?）、その倭国（「倭面土国?」）では、「卑弥呼」の前に、70~80年間男王の世が続いたということであるので、それが、この国であったことは間違いない?!「生口（奴隸）」160人を連れていったということであるが、多分それは戦争による戦利品?であったと考えられるので、その時期に、大きな政治変動が生じていたことは、おそらく間違いない

であろう（ただ、彼らは船で渡航したわけであるから、「生口（奴隷）」160人の移送が可能であったのかどうかという疑問はあるが？）?!

いずれにしても、これは、さらなる仮説（空想？）となるが、もし、その「帥升王」を、例の「素戔鳴命」のモデルだとすればどうなるか（そう指摘している人もいようであるが？）？要は、その「帥升王」（「素戔鳴命」？）が、「伊都国」の地から、「(倭) 奴国」の覇権支配を変えた人物であったならば、その後、彼の王統が70～80年間続いて、件の「倭国大乱」によって、「邪馬台国」の女王「卑弥呼」が共立されたということになる?!

ということは、この場合、「倭国大乱」とは、「(倭) 奴国」の衰退と「邪馬台国」の台頭という結果をもたらしたものとも言えるが、そこに、「伊都国 (or 倭面土国)」の「帥升王」の介在が考えられるのではないかということである?! 少なくとも、「(倭) 奴国」の衰退は、「伊都国 (or 倭面土国)」と「邪馬台国」の共闘によって実現されたと考えることが出来るわけである?!

そしてまた、一方では、「邪馬台国」自体は、「丹波 (→「丹後」)」に移動した、例の「火明ほあかり系」(九州物部氏?)の「海部氏 (倭直氏←珍彦/菟道彦)」が関わっていたのかもしれない (←「海部氏勘註系図」)?! 「卑弥呼」の死後、一悶着があり、13歳の宗女の「台与」が共立されたと、「魏志倭人伝」は記しているが、そこに、例えば「多氏」と「海部氏」の関係が絡んでいたとすれば、その辺もまた、考えていかなければならない?!

とは言え、まずは、ここでの問題（解明課題）は、その「伊都国 (or 倭面土国)」の「帥升王」の系統が、その後どうなったのかであり、もし、それが、「邪馬台国」の女王「卑弥呼」勢力に排斥され（邪魔にされ）、経路はともかく、「吉備」の方に移っていった勢力であったとすれば、その後の、「吉備・出雲連合」の話が、俄然真実味を増すことになる（その傍証として、吉備の「楯築遺跡」には、膨大な「朱」が敷き詰められていた！そして、その「朱」は、実は「伊都国」でも産出され、否、集積されて、その積出港として栄えていた?! 当時は、「朱」は、高価な交易品となっていたのでもある?!) ?!

すなわち、それは、例の「素戔鳴命」の高天原追放、そして、出雲降臨等の話となるのであるが、ここでは、かなりこじつけ的ではあるが、「帥升王」と「素戔鳴命」、名前の語呂的な近親さもさることながら、その役割（活躍？）が似通っているとも言えるのではないか（最初に開拓したのに、それが奪われた→同じ「天神」でありながら、先に地上に降り、姉?の「天照大神」に嫌われる?）?!

言い換えれば、(九州からの?) 吉備の勢力が、全国制覇?に向けて動き出すのが、まさに「倭国大乱」前後なのであるが（170～190年頃?）、その後、彼らの勢力（「手焙形土器」→「前方後方墳勢力」）は、出雲に進出し、そして、彼ら（の一部）を抱き込み、やがて播磨、河内、近江へと進んでいった?!

ただし、出雲は、元々の北部九州との利害関係を維持する勢力（と言うより、出雲から北部九州に支配を広げていた勢力→出雲王国？）と、一方で、吉備と合流した、言わば新しい勢力（「意富（宇）／多_{おお}」勢力？→「ワニ族」？）に分かれた?!それが、おそらく、「記紀」が伝える「出雲振根」と「飯入根」（兄弟？）の逸話であろう（前者が後者を殺すが、最後には、後者は、大和政権に殺された!）?!

そして、彼ら（「意富（宇）／多_{おお}」勢力？）は、まずは「近江」に集結し、そこから、同じく吉備出身（というよりは「經由」？）の太陽信仰族（三輪氏／大神氏?→物部族?）と「大和」で合流し、彼らは大同団結し、より大きな「前方後円墳勢力」となった?!その中心勢力（饒速日一族?）が、後に「物部氏」と呼ばれるようになった?!おそらく、これが、いわゆる「(初期)ヤマト王権」と呼ばれるものの実態（実体?）なのではないかということである?!

とは言え、ここで、改めて頭を悩ますのは、「海神」、つまり「安（阿）曇族」や「海部族」（その後の「宗像族」や「住吉族」も含めてであるが!）のことであるが、彼らが、どこの国（勢力）の海洋交易民で、彼らが、どのように連なっているのかである!

例えば、どこかの国（勢力）の王族となっていたのか、あるいは、あくまでも「海洋交易民」としての自由な航海と交易を求めて、様々な国（勢力）と、言わば独立不偏の関係を有していたのかどうかということである!もちろん、その代表格（最大勢力）が、北部九州の志賀島（志賀海神社）に根拠地をもつ「安（阿）曇族」である（彼らは、まさに、全国津々浦々に飛び散っていた!）。

ちなみに、かの「漢委（倭）奴国王印（金印）」が、その志賀島の、まさに何の変哲もない海岸部の河原（棚田?）で発見されたということであるが、その埋蔵が、そこの統治者である「安（阿）曇族」ではなく、それ以前の?「奴国」の王族の関係者（こちらも海人族?）の仕業であるとしたら、その「奴国」と「安（阿）曇族」の関係もまた、新たに検討されなければいけないことになる?!

と言うのも、一方で、その「安（阿）曇族」は、奴国の隣国の「伊都国」と（も?）関係があると思われるからである?!何故なら、その海洋交易民「安（阿）曇族」が詠っていたとされる和歌?（それが、明治期に、『古今和歌集』より採用され、「君が代」の歌となった!）にまつわる逸話や神社（例えば、「細石_{さざれいし}神社」）等が、実は、その伊都国にはあるからである!

その意味では、「安（阿）曇族」は、「奴国」とも「伊都国」とも関係があり（もちろん時期的には、そのつき合いの軽重は違っていた?）、彼らの海運力・ネットワークによって、その両国は支えられていた?!また、そういう中で、一方の「奴国」の衰退があったわけである?!しかしながら、それに直接呼応した形の「安（阿）曇族」の衰退はなかった?!つまり、志賀島（志賀海神社）自体の衰退はなかったということである?!

⑭ 改めて、「安（阿）曇族」とは?!そして、「隼人族」との関係は?

さて、ここでは、改めて、その「安（阿）曇族（→ここでは、以下、「安曇族」と表示）」とはどういう部族だったのか?!そして、彼らと「隼人族」との関係はどうであったのか、その辺りのことについて整理しておきたい!ある意味、その関係の解読?は、本古代史解明における最大の鍵となるかもしれないからである?!とりわけ、かの「神功皇后」や「武内宿禰」に関わっている「住吉大神」との関係である（その神は、絶対に「隼人族」と関係している?）?!

そこで、まずは、ここで頭を過るのが、いわゆる「江南系倭人（海人族）」に特有の「阿曇目^{あづみめ}」（目の縁の入れ墨）のことである!ただし、その「阿曇目」は、ここで言う「安曇族」ばかりでなく、例の「神武東征」に付き従った「久米一族（「大久米命」←「大伴連」等の祖「道臣^{みちのおみ}命」と「久米直」等の祖）」にも見られるという（←神武の後「伊須氣余理比賣^{いすけよりひめ}」の逸話）。

ちなみに、「大伴氏」も「久米氏」も、初期の大王に仕えた軍事氏族として、勇名を馳せるのであるが、後には、「大伴氏」が大王家筆頭の軍事氏族になっていく?!また別途、「佐伯氏」（豊後の大族「大神氏」の一族）とも軍事協力関係があったとされる?!とにかく、これらの氏族は、「阿曇目」を有する南方系の海人族（倭人）であるということである（例の「宗像氏」も同系列か?）?!

しかしながら、ここで重要なのは、件の「隼人族」と、ここで取り上げている「安曇族」との関係である!すなわち、「安曇族」は、博多湾内の志賀島を聖地とした、江南出身の海洋交易民と考えられるが（「倭奴国」の王族?）、「隼人族」や「宗像族」は、彼らの同胞?であり、特に「隼人族」（の一部）は、「安曇族」と組んで（東シナ海/九州西回り）、後に、「住吉族」となった?少なくとも、例の「住吉大神」と関係している（そのことは、「宇佐神宮」、その系列の「古俵/古要神社」の「傀儡^{くわい}舞」の怪?として残されている!どうみても、そこには、「隼人」の後見人?としての「住吉大神」がいるのである!）?!

ここで、少し面白い手がかりがある?!それは、例の、「息長氏」が関わっていると思われる、彼らの元の?根拠地（「秦王国」の一部?）であった香春岳の「香春神社（「辛国息長大姫大目神社/「忍骨神社」/「豊比咩神社）」の社前に書かれている、「第一座辛国息長大姫大目命は神代に唐土（中国）の経営に渡らせ給比、崇神天皇の御代に帰座せられ、豊前国鷹羽郡鹿原郷の第一の岳に鎮まり給ひ、第二座忍骨命は、天津日大御神の御子にて、其の荒魂は第二の岳に現示せらる。第三座豊比売命は、神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母にして、第三の岳に鎮まり給ふ、各々三神三峰に鎮座し、香春三所大明神と称し崇め奉りしなり。」のことである!

問題は、その「第三の岳の祭神」である「豊比売（比咩）命」のところである!すなわち、彼女が、「神武天皇」の外祖母であり、また、「住吉大（明）

神」の御母ということであれば、その「住吉大（明）神」は、少なくとも母系的には「ワニ（族）→和珥氏」ということになる?!私は、最初、「神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母」と書かれているので、「住吉大（明）神」とは、「（「日向三代」の）ウガヤフキアエズ」のことと受け止めていたが、改めて考えてみると（彼は、「神武」の父親なので、不可思議だとは思っていた?）、実は、「神武天皇の外祖母」とは、（「神武天皇」の母親の）「玉依姫」の「母親」ということになる!

そうなれば、その「玉依姫」と、姉である「豊玉姫」（ホオリ／ホホデミ／山幸彦の妻→彼女は「ワニ（族）」であった?!）の「父親」は、かの「海神（豊玉彦）」であるので（少なくとも、「豊玉姫」の場合はそうである?）、「住吉大（明）神」も、「海神（豊玉彦）」の子で、彼は、彼女らの兄弟か、別の父親との「異父兄弟」ということになる（もちろん、「豊比売（比咩）命」が、彼女らの「母親」である!）?!つまり、「住吉大（明）神」には、「海神（豊玉彦）」、さらには「ワニ（族）」の血が流れていたとも考えられるのである?!

さて、そうなると、改めて、「海神（豊玉彦）」と「豊比売（比咩）命」は夫婦?ではあるが、「住吉大（明）神」が、彼らの子なのか?それとも、「豊比売（比咩）命」と別の男性との子なのか?ということにもなる!もし、後者であれば、当然「豊比売（比咩）命」は、二つの部族（勢力）と関係を持っていたということになる（ちなみに、「玉依姫」は「カモ族」につながる?）?!

もちろん、常識的には?前者であるとは思われるが、いずれにしても、「海神（豊玉彦）」は、いわゆる「安曇族」、「豊比売（比咩）命」は「ワニ族→和珥氏／多氏?」（←少なくとも、娘?「豊玉姫」が「ワニ（族）」であるようなので!）と考えられるので、このつながり?は、「安曇族」と「ワニ族→和珥氏／多氏?」の関係を暗示していることは明らかであり、「住吉大（明）神」も、その関係であることは、これまた明らかであろう?!

しかし、一方で、その「住吉大（明）神」は、「隼人」の血筋も受けていると考えられるので、「海神（安曇族）」と「住吉大（明）神（隼人族?）」が、そのような血縁関係（「豊比売（比咩）命」を介して!）でつながっていることは、ある意味当然なのかもしれない?!何故なら、「海神（安曇族）」と「隼人族」は、東シナ海／玄海灘における「大海人族?」として協力・活躍していた?!

すなわち、「隼人」（ハヤヒト?）とは、別の?「航海神」を祖に戴く、操舵に巧みな「海人系氏族」であることは間違いなく（「応神」以降?、朝廷の警護や河川航行での先導役を務めている!）、そのことも含めて（「記紀」では、ある意味虐げられているようではあるが?）、彼らの存在の大きさ?が示されている（その証拠に、「隼人」の祖ホデリ・ホスセリ／海幸彦が、天孫ニギノミコトの三子神の中の長男とされている!）?!

翻って、また、『日本書紀』では、「阿多の国つ神『事勝国勝ことかつくにかつ神は、是伊弉諾尊の子なり。亦の名は塩土老翁しおつちのおきな』とあり、阿多の国津神、すなわち、阿多隼人の祖神が塩土老翁＝シオツチの神と明記されている」（宮島正人氏）。実は、その「塩土老翁」は、ここで言う「住吉大神」とも考えられており、そうなれば、彼は、限りなく「隼人族」と結びつくこととなるわけである?!

ただし、その「住吉大神」を祭神として祀っている「住吉系神社」（大阪、下関及び福岡市には、それぞれ本社のな？「住吉大社／神社」がある！）の祭主は、「物部系？」の「尾張氏」と同族の「津守氏」とされている！果たして、その「津守氏」が、ここで言う「隼人系」の氏族なのかどうか？残念ながら、そのことについては、今のところよく分からないが（だが、そうした氏族系譜については、後々の造作によって、かなりの変異が見られる！←『新撰姓氏録』）、「住吉大神」（住吉族？→津守氏）が、一方で、「武内宿禰」「神功皇后」「応神天皇」と関わりながら、瀬戸内海航路を牛耳っていたことは確かである?!

とは言え、この辺りの事情（史実？）は、かの「倭の五王」の時代（5世紀）の頃と、ほとんど？被っており（したがって、一番厄介な時代？）、それらとの関係性（整合性）が、改めて問われるところではある！すなわち、そこに、「伽耶」や「百済」との関係が、どのように絡んでいるのかということである?!

いずれにしても、そのことを、他ならぬ新羅系の「息長氏」が、自らに関わる歴史？として書き記していること自体は、別な意味で不思議なことではある?！それは、先述の、香春岳の「香春神社」の「社前書」のことであるが、「武内宿禰」や「神功皇后」のことはともかく（彼らは、身内であるので当然である？）、「神武天皇」や「豊比売（比咩）命」、そして、何より「住吉大（明）神」までも、自らの事績・関係性？と関わらせて書いているのである?!

つまり、「辛国息長大姫大目命」はともかくとして（「新羅」から持ち込んだ、彼らの祖先神？）、「忍骨おしほね命」（天孫ニギノミコトの父親→「忍穂耳命」？）や「豊比売（比咩）命」までも、その身内としているのである?！まるで、「記紀」における「高天原神話」を熟知しているかのようである?！とすれば、ひょっとしたら、そのストーリーの元話は、彼らの内にあったということか（否、彼らが、創作した?）?!

まあ、これについては、これから、改めて考え直して（追求して）いくことになるだろうが、この時点で、「記紀」の編纂（その原案づくり?）においては、藤原氏（不比等）だけでなく、その利害共有者（理解者／協力者?）であった「中臣氏」、そして「息長氏」、さらには「秦氏」が、大きく関わっていたということである（特に、後二者は、いわゆる「記紀」編纂を先行あるいは潜行させていた?）?！とりわけ、ここの文脈では、「息長氏」の関与が大きい?!

⑮「製銅・製鉄族（山の民→山つ霊→山祇^{やまつみ}）」と「海人^{あま}族（海の民→海つ霊→海神^{わたつみ}）」の相剋と建国?!

ということで、「記紀」が示す「神話」や「逸話」は、8世紀初頭の覇権者達（ある意味「勝利者達」？）が、自ら（の先祖）の正当性や正統性を遡及させるべく、可能な限りの情報を駆使して創り上げた、一つの大きな歴史物語であったということであるが（「正史」という形を採っているが！）、そこに、どのような事情、背景が横たわっていたのかである?!

さて、そんな中で、改めて、我が国古代史の全体像を俯瞰してみると（もちろん可能な限りではあるが！）、直接的には、「記紀」に示された「神々の体系」からということにはなるが、その構図は、いわゆる「製銅・製鉄族（山の民→山つ霊^み→山祇／山積^{やまつみ}族）」と「海人^{あま}族（海の民→海^{わたつ}つ霊^み→海神^{わたつみ}族）」の相剋と、彼らが織りなしていった建国の流れのように受け止められる?!

そして、その最終的な形「大和王権（大和朝廷）」は、その「製銅製鉄族（山の民→山つ霊^み→山祇／山積^{やまつみ}族）」と「海人族（海の民→海^{わたつ}つ霊^み→海神^{わたつみ}族）」の合流・合体の産物であった（そして、そのことを、暗に示しているのが、「記紀」の「日向三代」の物語ではないか?）?！そういうことである?!

ただし、その構図（流れ）には、当然かなりの紆余曲折があったということであり、その最終的な覇権者（勝利者?）となった百済系王族（天智系／温祇系余氏、直接的には「藤原氏」）と、その理解者・協力者であった幾つかの氏族達（中臣氏、息長氏、秦氏等）は、そこでの、自らの（氏族の）正統性・正当性を、「記紀」という歴史物語（実際上は、「正史」とした『日本書紀』）によって遡及しようとした?!

そして、その遡及の大きな視点（軸?）が、まさに「製銅製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」（双方共に、基本的には「渡来系倭人」ということになる?）の、合流・合体の歴史ということである（そのようにしたということ?）?!

したがって、もちろん、そのこと自体は、ある意味事実であったわけであるので（ただし、その中には、実際の離反や衝突といった要素も含まれている!）、我々の古代史解明の、一つの大きな手助けともなるわけであるが、問題は、その「製銅製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」とは、具体的には、どういう種族であったのか?そして、彼らは、どのように我が列島（倭国）に入り、どのように、その活動（生活）を展開していったのかということである!

尤も、そのことは、「弥生人」全体、そして「縄文人」全体も、そういう人々であったわけであるので（元を辿れば、新人類／ホモサピエンスは、アフリカから出立していった→グレート・ジャーニー!）、それはそれでいいのであるが、冷静に受止めてみると、「記紀」が示す史実?（「神代」を含めて!）は、どう考えても、3世紀前後（決して、BC660年頃ではない!）の「大和」（奈良盆地）の

状況から始まっている?!そして、実は、そのことを示すものが、「神話」として描かれている、「天孫降臨」から「神武東征」の話ということである?!

ということは、8世紀初頭に、最終的な覇権者（勝利者?）となった百済系王族（天智系／温祇系余氏、直接的には「藤原氏」と、その理解者・協力者であった幾つかの氏族達（中臣氏、息長氏、秦氏等）は、我が国の「建国」を、その時の「大和」から始まったという認識をもっていた（決めた?）ということである（多分、それは、第10代の「崇神」からということである?だから、彼を、「御肇国天皇ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」とした?）?!

であれば、その初代「神武」はどうなるのか?彼もまた、まさに「始馭天下之天皇ハツクニシラス・スメラミコト(始祖王)」とされているのではないか!周知のように、彼は、人皇初代と位置づけられているように、自身は、いわゆる「神」ではなく、「人」（の最初?）である!そして、そこから、第10代「崇神」、さらには、それ以降の天皇系譜が示されているわけでもある!だから、彼も、「ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」とされた?!

時代も、意味も違うので（そのようにされた!）、そこに、それぞれの「ハツクニシラス・スメラミコト」がいても不思議ではないが、やはり、そうは言っても、国を創始した人物が二人いるということは、どう考えてもおかしい?!先行する人物（天皇）の「始祖性」を、後から来た人物（天皇）が継承した!だから、二人の「ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」がいる!遙か後世の人間（「記紀」編纂時の政権）として、その二人の人物（天皇）を、正統な始祖として、ある意味平等に認める!そういうことであつたのか?!

しかし、やはり、それでも変である?そこに、何らかの事情（目論見?）があつたとしか思えない?!考えられるのは、一人の人物（の事績）を、時代的に引き離し、二人（の事績）に分けた?あるいは、二人はともに、まさに「ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」に相応しい人物（の事績）であつた?!しかも、彼らは、3世紀中頃?の「同時代人」であつた（何故なら、「神武」のBC7世紀頃は、考古学的にみて、そうした事績自体が存在し得ないからである!）?!

そこで、後者の場合は、後の、ある中心（起点）人物（天皇）からすれば、まさにそのようになる?!その人物（天皇）の父系と母系に、それぞれ「ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」に相当する人物（天皇）がいたということである?!であれば、それは、ある意味当然の成り行きとなる（ただし、当時は「母系」でのそれであつた?それ故に、そこには、ここで言う「製銅製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」の婚姻関係が、期せずして示唆されているとも言える?）!

ちなみに、ここで言う「ある中心（起点）の人物（天皇）」とは、8世紀初頭に、最終的な覇権者（勝利者?）となった「百済系王族」（天智系／温祇系余氏、直接的には「藤原氏」と、その理解者・協力者であつた「幾つかの氏族達」（中

臣氏、息長氏、秦氏等)の覇権の出発点となった、第15代の「応神天皇」であることは、ほぼ間違いない?!

ただし、その応神だとて、実際の人物(天皇)であったわけではなく、言わば、上記の百済系王族と、その理解者・協力者であった幾つかの氏族達によって創り出された?人物(天皇)であった?!とは言え、もちろん、それに相当する、つまりモデルとなっている人物はいたのである(百済系王族/沸流系余氏・百済残国兄王藤→倭の五王「讚」の父親?)?!

ということで、私は、現在、かなり、この後者の見解(類推?)に近づくものであるが、もし、そうであれば、具体的な史実として、それはどうであったのか?そここのところの解明が、是非とも欲しいということになるわけである!しかるに、ここでは、その具体的な証拠は、なかなか提示することは出来ないが、その大枠については、かの「記紀」、とりわけ、その「神代期」の記述から類推することは出来るわけである?!

何故なら、「記紀」の「神代期」のストーリーは、「人皇期」までの、言わば先史的な事実ではなく、その後続いた、各種氏族/勢力の動き(攻防/興亡?)、そして、彼らが果たした役割を、まさに「神話(「高天原神話」)」として再構成(脚色?)したものと考えられるからである?!要は、そこにあった、それぞれの史実?を投影(変形?)したものであるということである(ただし、見かけ上は、当然ながら、時間的な前後関係となっている!そこが、ミソなのである?)?!

そこで、そうした「神話」から、ここで言う「製銅・製鉄族(山の民→山つ霊_み→山祇/山積_{やまつみ})」と「海人_{あま}族(海の民→海つ霊_み→海神_{わたつみ})」の相剋と、彼らが織りなしていった建国の流れを確認していくと、双方は、「天照大神」系と「素戔鳴命」系に対応させられている?!言い換えれば、前者は、後から進出してきた「扶余・百済系(一部伽耶系が加わっている?)」、そして、後者が、先に進出していた「江南系/伽耶・新羅系)」ということであるが、別な言い方をすれば、前者が「高天原(天津神)系」、後者が「出雲/根の国(国津神)系)」ということでもある?!

ただし、もちろん、「製銅・製鉄」と「漁獵・海洋交易」という、言わば「生業」的な区別は、分かり易いが、あまりにも単純過ぎる?!つまり、その「生業」的な要素は、双方の種族/勢力のどちらにもあったわけであり(協力関係や婚姻等によって、両者は融合されてもいった?)、それでもって、双方の種族/勢力を特徴づけることは出来ない(危険である?)ということである!

とは言え、少なくとも、彼らの中には、種族/勢力としてのアイデンティティ、そして、受け継がれてきた習俗・文化等は、それぞれに大切にされ、ものによっては、それらが、自らの象徴とでも言うべきものとなっていた(例えば、「安曇族」の「安曇目」等?)?!そういうことである!

⑩ 敢えて、「高天原神話」の構図？を描き出してみると？

さて、そこで、⑨からの続きとなるが、そこでの「海人^{あま}族（海の民→海つ霊^み→海神^{わたつみ}）」の中に、かの「賀茂氏（族）」が入るのかどうか？そして、入るとすれば、どのように入るのか？「神武東征」で、紀伊・熊野、そして大和入りで大いなる働きをしたとされる「カモタケツヌミ（八咫鳥^{やたがらす}）」（彼自身は、日向の「襲^そ」の出身とされる？←『山城国風土記』）、そして、神武が、大和入りの最後の準備をしたとされる「吉備」のこと（そこには、吉備勢力の象徴？「手焙型土器」の発生地、「西加茂遺跡」もある→現在も、広大な「加茂地域」がある！）、さらには、「事代主」や「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）」等を考えれば、当然「海人族」であったということでもある？！

そこで、ここで、改めての挑戦？として、「記紀」最大の舞台仕掛け？「高天原神話」の構図？を描き出してみることにしたい！ただし、もちろんそれは、様々な要素（材料）から構成されているので、そう単純には描けない？！だが、その基本構図は、最後の覇権者（勝利者？）「持統・藤原政権」自らの正統性・正当性（権威）の淵源を示す、言わば「見取り図」でもあるので、そこに、どのような真実が埋め込まれているのか、それがよく分かるというものである？！

ただし、最初の「天地創造」のことは、よく言われるように、古代中国の思想（書物）からということであるが（特に『淮南子』から！）、いわゆる「伊弉諾」と「伊弉冉」男女二神の「国生み／神生み神話」は、キリスト教の「アダムとイブ」の話から創出（借用？）されていることは、ほぼ間違いないであろう？！ちなみに、例の「聖徳太子馬小屋出生譚」も、そうである？！

それらは、当時の「遣唐使」が持ち帰った、ネストリウス派キリスト教＝景教の影響、あるいは古代イスラエルにルーツを有する？「秦氏」の介在ということになるが、その話（祖先伝承？）を「記紀」に持ち込んだのは、その「秦氏」なのではないか？！すなわち、それは、謎の？「消えた古代イスラエル 12支族」の話とも関係してくるわけであるが、その痕跡・事績は、実は無数にあるのである（神社の鳥居、神輿等？）？！

ただし、ここでの問題は、そこからであり、一つは、最初に出現し、協力し合った男女一対神「伊弉諾（系）」と「伊弉冉（系）」であるが、それが、結局は破局を迎え、前者の「伊弉諾（系）」が、「高天原」をリードすることになり、彼が、「天照大神」や「素戔鳴命」（「蛭子」「月読命」もいるが！）を単独で生み、その後、「（姉の）天照大神（系）」が天上（「高天原」）、「（弟の）素戔鳴命（系）」が海原／地上（葦原中つ国→出雲）という風に分かれたとするわけである！

そして、最後に、その天上（「高天原」→天神系）の「（姉の）天照大神（系）」が、海原／地上（葦原中つ国→「出雲」→地祇系）の「（弟の）素戔鳴命（系）」の子孫（子ども？）の「大国主命」に「国譲り」をさせ、その後は、その「（姉

の「天照大神（系）」が、「倭国→日本国」を創り出していった?!もちろん、これは、「(姉の)天照大神（系）」が「持統・藤原政権→高天原系←百濟（扶余）王族?」、「(弟の)素戔嗚命（系）」が「蘇我氏／物部氏等→根の国系←出雲神族?」を象徴していることは明らかである?!

前者が、まさに「高天原系」であり、後者が「根の国系」であるということであるが、そこには、「陰陽思想」（あるいは「善と悪の抗争」←ゾロアスター教／拝火教）が取り入れられているようでもある?!とは言え、要は、そこに示されている「二神（天照大神と素戔嗚命）の役割（関係性）」が重要であり、その役割（関係性）から生まれた（「誓約^{うけい}」によって!）、次の「宗像三女神」と「五男神」の役割（関係性）が、さらに大きな意味をもっている?!

すなわち、これ自体は史実であり、まったくの創作あるいは、何かからの借用?では決してないということである（逆に、実際の史実?に、その存在・関係性を被せているということである?）?!ということは、ここから、件の「三女神」と「五男神」の話を、いかに「史実として?」再現できるかということであるが、前者については、直接的には、「天武・高市系」（宗像徳善／尼子姫⇔宗像氏←三沼君氏／筑紫君氏等?）と、ある意味容易に類推される?!

すなわち、「天照大神」と「素戔嗚命」の誓約による、片や「(宗像)三女神（←スサノオの物実）」、片や「五男神（←アマテラスの物実）」の関係はどうなるのかということであるが、前者には、「天武」と「宗像君尼子媛」の関係があり、その子「高市皇子」は、天武の死後、後継天皇に即位していた（最古の漢詩集『懷風藻』による）?!ならば、そこに、「宗像氏」との関係が埋め込まれていても、何ら不思議ではない?!

ただし、果たしてそれだけで、かの「素戔嗚命」の物実として、「宗像三女神」が位置づけられるのか?考えられるのは、例えば、「出雲大社」に祀られる「宗像三女神」の長女?「田心^{たごり}／^{たざり}姫」（宗像大社沖津宮祭神）、「宇佐神宮」の主?祭神「姫大神」（「宗像三女神」とされている!）、「厳島神社」の「市杵島姫命」（宗像大社辺津宮祭神）等の存在である?!故に、彼女らは、みな出雲（大国主命）系の関わりであるということになる（ただし、何故か、三人の姫神は、本元の「宗像大社」では、その祭祀宮に不整合があるようではある?）?!

しかも、「田心^{たごり}／^{たざり}姫」は、例の「カモ族」の「アジスキタカヒコネ」と「下照姫」の母親でもある!また、その妹の「下照姫」の夫は、「高皇産靈神」に殺された「天雅^{あめわか}彦」である!さらに、かの「事代主神」も、同じ「カモ族?」の「神屋楯^{かむやたて}比売命」と「大国主命」との間の子とされている（ただし、「田心姫」と「神屋楯比売命」は、同一人物（神）ということもある!）?!

ということで、「宗像三女神」は、まさに「出雲」の「大国主命」と関係（夫婦神）があるのであり、その意味で、「素戔嗚命系」（物実）とされるのは、ま

さに至当なのである?! そうなってくると、ここには、それこそ壮大な史実? が横たわっていたことになる(そして、「カモ族(→賀茂氏)」が、その中心にいる?)?!

そこで、また、そうであれば、後者の「五男神」の系統(氏族・勢力)が、どのようであったのかということになってくるが、それは、実際の大和(倭国→日本国)建国に際して、最後の覇権者(勝利者?)「持統・藤原政権」から見て、まさに身内として参画・協力した氏族・勢力を、言わば「兄弟として」集合させていることは間違いない(ただし、そこにも集散離合はあった?)?!

すなわち、彼らは、長男「天忍穂耳^{おしほみみ}」(→天皇家※だが、実質は「息長氏」を指している?)はともかく、「天穂日^{ほひ}」(尾張氏一派?→出雲臣、土師連等の祖。彼らは、出雲に同化した?!)、「天津彦根」(木ノ紀国造→凡河内^{おおしかふち}直、山代直等の祖)、「活津彦根^{いくつひこね}」(→?)、そして「熊野櫛樟日^{くまのくすび}」(→熊野諸族?→尾張氏本流?)である!

だが、残念ながら、上記のように、まだまだその詳細ははっきりとしない?! とりわけ、その中の「活津彦根命」の後裔氏族がはっきりとしない?! とは言え、彼? (活津彦根命)は、「恩智^{おんじ}神社」(八尾市在)の祭神である、「天兒屋^{こやね}命」の後裔の「御食津^{みけつ}臣命」の妻「御食津比売命」と関係がある?! そして、それが、忍坂と住吉にある「生根^{いくね}神社」の祭神(現在は、「少彦名命」等)や「生國魂^{いくくにたま}神社」の祭神と同神ともされるらしい(この祭神「生島神^{いくしまのかみ}」「足島神^{たるしまのかみ}」は、国土の神霊とされ、新天皇の即位儀礼の一つである「八十島祭^{やそしままつり}」の際には、主神に祀られる重要な神であった!)?!

ということは、そこに、例の「外宮(伊勢神宮)」の「豊受大神」が絡まっているのかもしれない?! そして、多分それは、「海部氏」(←「倭直^{やまとのあたえ}(国造)氏」←「吉備氏/道臣氏?」←「ホアカリ系」?)なのかもしれない?! とにかく、ここで、最も分かりにくいということは、逆に、それだけ、(分からないように)配慮?されているということでもある?!

次に、そこから、(天照大神の)直裔として、「五男神」の長子「天忍穂耳」の子「瓊瓊杵^{にぎ}命(天孫)」が降臨することになるわけであるが(ただし、これは、史実?としては、「持統」の子・「草壁皇子」の早世による、孫の「文武ノ軽皇子」の即位を暗示していることは間違いない?)、彼?と「鹿葦津^{かしたつ}媛」(吾多津^{あたつ}姫/木花開耶^{このはなのさくや}姫)との子達が、言わば、新たな「三男神」である!

すなわち、長男「火闌降^{ほすせり}/火照^{ほでり}」(海幸彦→隼人族)、次男「火遠理^{ほおり}」(山幸彦・彦火火出見→天孫)、三男「火明^{ほあかり}」(饒速日→物部/尾張氏族)ということである(『記』と『紀』では、少し違うが!)?! 要は、最終的には、「ヤマト王権(大和朝廷→百濟系王族政権?)」は、「隼人族(→「住吉大神」?)」と「天皇家」と「饒速日系(「物部族」)」の、三つの種族(氏族)の連携と協力によって成立したという「虚構」が、そこに示されているということである?!

⑰ そこに、「天智系（筑紫倭国?）」と「天武系（豊国倭国?）」の関係が投影されている?!

そこで、これもまた、⑮からの続きとなるが、他ならぬ「天皇家（天孫）」は、件の新たな「三男神」の中の「火遠理^{ほおり}」の系統（彦火火出見^{ほほでみ}→鵜茅葺不合^{うがやふきあえず}→神武／彦火火出見）とされているわけであるが、改めて、何故、そこに「火闌降^{ほすせり}／火照^{ほでり}」が、天皇家（天孫）／大和王権の構成神とされているのかである?おそらく?最初の勢力（海人族→安曇族・倭国）が、南九州の「隼人族」と協力して、最初の王権（北部九州）を築いた?!そして、その後も、「隼人族」は、なくてはならない種族／勢力であった?!

すなわち、前にも述べたように、「隼人^{はやと／はやひと}」とは、船の操舵がうまい、俊敏?→速く漕げる人という意味で、船での移動が主であった当時においては、そうした「海人族・海洋民」の存在は大きいものであった（この場合は、河川／急流航行!）?!そういうことを示しているのではないか?!あるいは、もっと突っ込んで、ひょっとしたら、その後の、「応神」と組んだ「住吉大神（族）」への配慮が、そこにはあったのかもしれない?!

そこで、そのことも視野に入れて、改めて「記紀」の全体構図を捉え直すと、そこには、まさに「天智系（筑紫倭国?）」と「天武系（豊国倭国→日本国?）」の関係が投影されているのではないかという疑念（ある意味単純な理由?）が生じてくるのである?!何故なら、前者の「天智系（筑紫倭国?）→持統・藤原政権」が、後者の「天武系（豊国倭国→日本国?）」を、最終的に駆逐?したのが、その直前の状況であったからである?!

すなわち、701年の「大宝律令」の制定が、その成就（内外への周知）となったのであるが、その「律令」の制定（権を有すること）こそが、その「国家」の国家たる所以（証し）となるということである?!そしてまた、それが、『日本書紀』作成（仕上げ?）の、直接的な動機でもあった?!

ちなみに、『古事記』は、そうした『日本書紀』の作成過程において、書紀のストーリーとは違うものを、すなわち、正統な自家（氏族／勢力）の歴史を伝えるべく（ただし、それも、あくまでも、その自家（氏族／勢力）の言い分として?しかも、表向きは、『書紀』の言い分を肯定しながら?）、おそらく「多氏（太安万侶）」によって準備されたものであろう?!

しかし、それは、かの「天武」によって詔勅されたという「国史編纂」時のものではあったろう?!言わば、それが、「底本」（『原日本紀?』→例の「乙巳の変」の際に、「蘇我蝦夷」邸で焼失したとされる「天皇記」「国記」等か?それらは、かの「蘇我馬子」と「聖徳太子」によるものとされてはいるが?しかも、）となっていたということである（もちろん、『日本書紀』も、その『原日本紀?』を底本にしていたことは間違いないであろう?）?!

しかるに、そうした経緯の中で、標記の「天智系（筑紫倭国?）」と「天武系（豊国倭国→日本国?）」の関係は、どのように解明されるのかということになるが、その「証拠」（理由／原因）は、例えば、前者は、「舒明」と「皇極」の子でありながら（そして、長兄でありながらも?）、「皇極」のすぐ後に即位しなかった（出来なかった?）！それは、もう一方の「天武」の存在があったからである（しかも、両者は、実の兄弟とされながらも、互いに、自分の娘を複数嫁がせている！実の兄弟であれば、こんなことは、到底あり得ない!）?!

要は、「天智」と「天武」は、実の兄弟ではなく、しかも、「天武」は、「皇極」の前夫「高向^{たかむこ}王」（「用明天皇」の孫）の子の「漢^{あや}皇子」の可能性が高く（したがって、天武の方が年上!）、そちらの方の血統が、「（倭→大和の）日本国」の血統としては、正当（正統?）であった?!そう考えられるのである?!

もちろん、これ自体は、実証できるものではないが、その決定的証拠?となるのが、「天智」が、「（大和）飛鳥」から「近江」へと遷都したということ、そして、彼は、そこで、いわゆる「九州（倭国）」の年号（「九州年号」）を使用（発布?）していたということである?!おそらく、彼は、例の「白村江の戦い」の時の倭軍大将?「筑紫君薩野馬^{さつやま}」（彼自身は、大王／天皇ではなかったかもしれないが?）の類族であったろう?!要は、彼は、「倭の五王」（具体的には、「百濟温祇系余氏」）から続く「筑紫倭国」の一員（皇族）であったということである?!

そして、さらに、その「天智」は、最初「称制」（儀式を経ずに、勝手に名乗ること?）によって「天皇」となったということであるが、それは、上記「薩野馬」が、敗戦責任者として（ということは、彼が、一応「倭国王」?）、「唐」の捕虜になっていた時に（確か5年間?）、その間隙をぬって皇位（「倭国王」?）に就いたとすれば、それ自体は、まさに辻褄が合うことになるわけである（正統性／正当性?は、一応賦与される?）?!

ちなみに、その「（九州）倭国」（本邦では本家となる!）が、600年に、「隋」に遣使した「アメタラシヒコ（阿毎→天氏）」の国であり、少なくとも、その「（九州）倭国」は、701年の「大宝律令」の頃までは存在していたとされるのである!それ故に、かの「天智」は、その「アメタラシヒコ（阿毎→天氏）」の一族、おそらく、その皇位継承権を辛うじて有する人物であったわけである?!

なお、その「（九州）倭国」の先代の王達、すなわち「倭の五王」（讚・珍・濟・興・武）達は、「記紀」では、「近畿倭国→日本国」の「仁徳」「履中」等に振り分けられていると考えられるが（しかし、一対一対応ではない!そうすれば、真実がバレてしまう?否、別の人物を、それに当てている?したがって、その比定自体は出来ない?）、その「（九州）倭国」全体の状況については、かの「武」の宋への「上表文」（誇張やかなりの拡大解釈はあったとしても?）に書かれている

ことを加味すれば（東に、西に、そして半島に進出したこと→版図／「櫛魯^{たんろ}」を広げたこと！）、当然？近畿大和も、その版図／「櫛魯」に入っていたことになる？！

もちろん、それは、いわゆる「東国」も含めてであるが（それが、当時の「(九州)倭国」であった！）、その中の「近畿倭国(日本国)」は、形式的には「(九州)倭国」の一員（「櫛魯国」）であったということである！実は、これが、まさしく「二つの倭国」ということの実態（実体？）であったわけであるが、「記紀」は、当然、その「近畿倭国(日本国)」から、全体の「倭国史」を描いて（ある意味造作して）いるわけである（最終的には、そうなったからではあるが！）？！

ということで、「天智系（筑紫倭国？）」と「天武系（豊国倭国→日本国？）」の関係は、言い換えれば、「(九州)倭国」と「近畿倭国(日本国)」という関係にあり、しかも、「記紀」は、直前の「天武系／「近畿倭国(豊国倭国→日本国?)」を駆逐した（皇位を奪還した？）「天智系」／「(九州／筑紫)倭国)」の立場から描かれたものとなっているので、その辺りの史実？の説明（説得？）には、二重の困難？があったということである？！

つまり、一つが、直前の「天武系」／「近畿倭国(豊国倭国→日本国?)」を、ある意味悪逆な手段を使って打倒したことへの後ろめたさ！そして、もう一つが、その後ろめたさ（真実であったので仕方がないが？）を含めて、自らの皇統の正当性／正統性を、真実の「倭国全体の歴史」から示す必要があった？！そういうことである（だから、解釈する我々が苦勞するのでもある？）？！

最後に、ここでは、かなり文脈は異なってくるが、「伊弉諾」と「伊弉冉」の訣別のきっかけをつくった「軻遇突智^{かぐつち}（火の神？→これを産んだがために、「伊弉冉」は黄泉の国へ行った→死んだ！）」という神がいるが（確か、全国各地にある「愛宕^{あたご}神社」の祭神？）、彼？を、「火の勢力」（火神信仰→手焙形土器（甕/甕^{みか}）→前方後方墳勢力）とみると、また、面白い展開（史実？）が見えてくるかもしれない（その「火の勢力」は、「熊野櫛樟日」(→出雲の「熊野大社」)と関係がある？→そして、それは、「初期の出雲」が衰退したことを示すものか？)？！

ちなみに、「出雲の国譲り」（神話）というものは、何も、「天孫族」が、「出雲」の地に乗り込み、そこを占領・支配したということではない（そういう事態も、一時期あったとは言えるが？）！

要は、それまで、「出雲(族)」が支配（統治）していた地域（葦原中つ国→ブレ倭国→日本国)の支配（統治？）権を、後から来た「天孫族」が譲り受けた（奪った！）という話である！だから、その真実解明の目は、当の出雲地方にだけ向けられてはいけないのである（→稲佐の浜での「タケミカツチ」と「タケミナカタ」との激闘等で、そのように仕向けられてはいるが？）！

⑩ 歴史（「記紀」）を操作した（最初に創った？）のは、「息長氏」と「秦氏」?!

ところで、そうした歴史（「記紀」）編纂に当たっては、『古事記』（ある意味政権を奪われた側の後裔→「多氏」）と『日本書紀』（奪った側の後裔→「藤原氏」／百済系豪族?）の立場が違っている要素（原因）もあるということであるが、もちろん、それらは、まだまだ不分明ではある?!しかしながら、「住吉大神(族)」と組んだ「応神（百済系勢力?）」!そして、彼らによる「瀬戸内海航路」の制圧!そこにまた、「息長氏」や「秦氏」が絡んでいる?!そういうことは言えそうである?!

そこで、ある意味そういうことを前提とすると、件の「記紀」が、我が国の建国史を示している、そして、その大枠自体は事実なのであろうが、そこには、その前史（元話?）、すなわち、そういうことを示している（そこに使用されている）文書や言い伝え等が、先にあった（創られていた?）ということである?!何故なら、そういうもの（ネタ／材料）がなければ、とても古代からの連綿たる歴史は書けないからである?!ましてや、「新参者?」であれば、なおさらである（藤原氏、あるいは百済系王族は、一番後に渡来してきた氏族・勢力である?!）!

したがって、別な意味で、問題は、その元となる話?を、誰が創作（起草?）したのかということになり、今、俄かに思い始めていることは、多分?それは、「息長氏」や「秦氏」であり、「記紀」の事績・逸話は、それらの合作（取捨選択?）によってなされたのではないかということである?!つまり、「息長氏」（かの「神功皇后」や「継体天皇」とつながる!）と、「ある時」から、彼らと、言わば「一心同体?」となった「秦氏」の関わりが、そこにあるのではないかということである（特に、「天孫降臨」の構想は、彼らが編み出した?）?!

しかも、今、改めて痛感することは、その「秦氏」は、想像以上に影響力（財力に物を言わせ?）をもっていたということである（645年の「乙巳の変」の実行犯?であった可能性も含めて?）?!具体的には、数多くの事績、例えば神社創建（京都の賀茂大社：上賀茂神社／下鴨神社、伏見稻荷大社等）、仏教への影響（広隆寺、修験道／役小角）、そして、それらに関わる経済・文化面での活躍・貢献ということである（しかも、そこにユダヤ系要素の導入?も見られる→神社様式）?!

だからこそ、そのことは、例の「高天原神話」に対するこだわり（自負?）にもつながっている?!どういうことかと言うと、そこには、「秦氏」の伝承が重要な役割を担っているということであるが、それがあからこそ、例えば「宇佐神宮（「八幡大神」←「応神」?）」を巡る、「大神^{おおが}氏（→「高千穂氏」）」と「秦氏（→惟宗^{これむね}氏）→辛島^{からしま}氏（→島津氏）」の、「天降り神話（天孫降臨）」の本家?争いも出来たのである?!

すなわち、そこには、後者の、前者に対する意地（正統意識?）もあつたということであるが、具体的には、宇佐（八幡宮）から大隅に移住させられた（「隼

人」鎮圧のため?) 彼らは、自ら創祀した「鹿児島神宮」を「正八幡宮」と名乗り、自ら(秦氏→惟宗氏)が、「宇佐神宮」の正統な祭祀者、そして、「天孫降臨神話」の生みの親? だということを、世に知らしめたということである?! だから、例の「二つの高千穂(天孫降臨地? →宮崎県高千穂地方と霧島山系高千穂の峰)」の存在(謎?) については、そこに原因があるということである(以前にも述べたように、このことは、ある意味大発見かもしれない?)!

ところで、最初の、その「ある時」ということは、まだまだよく分らないのであるが(ひょっとしたら永遠に分らない?)、それぞれの成立年代(古事記: 712年/日本書紀: 720年)の、少し前(or それなりに前?) であることは言うまでもない?! その事実(雰囲気)を示すのが、例の第40代「天武天皇」の時代であろうが(国史編纂の動き→「削偽定実」)、その材料(ネタ)となったものは、当然、各地・各様にあった、しかも集められた? 「文書」や「言い伝え」であったことは言うまでもない!

ただし、問題は、その材料(ネタ)となったものを、誰(どんな勢力)が、どのようにつなぎ合わせ、まさに編纂(ある意味創作?) したのかということであるが、当然ながら、その違いによって、同じ歴史であっても、様相はかなり違って来るわけである! それ故に、『古事記』は、「推古朝」までを書けばよかつたのである(そこまでで、自分達の言い分は、書き尽くせているから?)?!

もちろん、最終的には(特に『日本書紀』は!)、時の「覇権勢力」であった「(百済系)持統・藤原体制」が、その完結形を狙ったわけではある(その後も、加除修正の連続ではあった? →「桓武」の時に完遂?)?! 多分、そのことは事実であろうが、別の問題は、それに協力・加担した、あるいは具体的な記事内容の材料(ネタ)を提供した氏族・勢力が、一方であったであろうことである?! それも、「中臣氏」「息長氏」「秦氏」「賀茂(直)氏」であったということである?!

すなわち、「持統・藤原政権」は、最終的な勝利者? ではあったが、その実績は浅く(しかも、あまり誇れない?)、事実としては、まさに「中臣氏」「息長氏」「秦氏」「賀茂(直)氏」等の協力(参画?) によって、それまでの歴史が創られてきたということでもある?! 言い換えれば、彼らは、ある意味勝者側の氏族・勢力であったということである?!

しかしながら、もちろん、そこには、一方で、敗者側の氏族・勢力もいたわけである! 「蘇我氏」「物部氏」「尾張氏」等がそれであるが(むしろこちらが正当・正統?)、もし、そうであれば、当然「記紀」の読み(解釈)は、こうした解釈の下で深められなければいけないということになる?!

例えば、「記紀」に先行した『天皇記』『国記』(620年、「推古天皇」の命によって、厩戸^{うまやと}皇子/聖徳太子? が、蘇我馬子と一緒につくったとされる?) であるが、『日本書紀』は、蘇我蝦夷の家にあった両書は、645年の蘇我本宗家の

滅亡の際に焼失したとするが、船史恵尺(ふねのふひとえさか)が、その中の『国記』の一部？を取り出し、中大兄皇子／天智に差し出したとしている?!だが、その話は、限りなく怪しい?!

ただ、いずれにしても、「神話」の世界でいう「高天原＝天上」（「天津神／天神・天孫族」）は、当然？前者の「中臣氏」「息長氏」「秦氏」「賀茂（直）氏」等の勢力関係（あるいは出発地／居住地？）を指しており、「葦原中つ国＝地上」（「国津神／地祇族」）は、「蘇我氏」「物部氏」「尾張氏」等の勢力関係（あるいは出発地／居住地？）ということになるわけでもある?!しかし、そこに、「天照大神」と「素戔嗚命」の関係が、複雑に絡まっていることは言うまでもない（何故なら、「素戔嗚命（系）」も、一応「天津神」ではあったわけである!）?!

もちろん、そういうことではあるが、そこに、例の「陰陽思想」、あるいは「善と悪」の二元論的歴史観（←拝火教／ゾロアスター教?）による、自らの建国史の樹立という構想図が、そこに埋め込まれているわけでもある?!また、よく、「日ユ同祖論」とか、「イスラエルの消えた 12 支族の謎」とかということで、我が国の建国における「ユダヤの要素」が指摘されるが、どうもこれは、決して一笑に付せない？真実のような感もある?!

つまり、シュメール（人）やユダヤ（人）の匂い？や痕跡（神社の鳥居や山伏のいで立ち、菊の御紋、聖徳太子像 等々。また、千葉県芝山町にある「はにわ博物館」には、そのユダヤ人と目される「人形埴輪」もあるらしい!）のことであるが、例えば、「阿曇氏」の祖神は「海神」とされているが、その「安曇氏」が、どうも、そのユダヤの要素をもつ「秦氏」と繋がっていた?!その証拠?として、「対馬」の「海神わたつみ神社」（綿津見神＝阿曇氏の宮）の祭神は、もとは「八幡神」であったとされるが、その八幡神は、「秦氏」が奉斎する神であるから、「綿津見神」が、「秦氏」と関わりがある?!

そしてまた、その「綿津見神」の子が「宇都志日金拆うつしひがなさく命」（意味は、「ユダヤ系の神で、鏡を割る風習をもつ神」とされる?）であるので、割れた（割られた）鏡が、伊都国の王墓から出土するということであるが、後の『新撰姓氏録』では、「安曇連」は、「綿積神命」の児「穂高見ほたかみ命」の子孫で（『古事記』では、綿津見命の子「宇都志日金拆命」の子孫とある）、そうなれば、「穂高見命」は「宇都志日金拆命」ともなる?!

よって、勾玉・（割られた）鏡・剣（の三種の神器?）がセットで出土する怡土いと郡の諸遺跡は、「宇都志＝ユダヤの」＋「日金拆＝鏡を割る」風習をもつユダヤ系伊都国の王墓であったということになるわけである?!なお、その伊都の地には、「波多（秦?）江」（秦の港?）という地名が残っている!「波多氏」は、「弓月君」一行（秦氏の本隊?）より早く渡来していたが、彼らも、秦氏族であった（ちなみに、波多氏は、かの「武内宿禰」系の一氏族となっている!）?!

⑨ それを、集大成（改竄／剽窃？）したのが「藤原氏（不平等）」？！

ということで、改めて「歴史」の解明と言うことで言えば、その「記紀」に示されていることは、史実？のかなりの反映であることは間違いなく（捏造も含めて！）、しかも、「神話」は、誰か（どこかの勢力）が、そうしたことを、意図的、暗喩的に示しているということである（換骨奪胎的とも言えるが？）？！

もちろん、そうした理解をすることは、かなりの英断であり、これまでの通説や、それに基づく「天皇家への敬慕」を蔑ろにする恐れもあるが、史実を知るといふことと、その話（「記紀」）の作成意義を解明するといふことは、まったく次元の異なる話ということである！

ちなみに、最も要となっている「応神」（事実上は、それに仮構されている人物！）については、その実在の確かさは、多くの人が認めるところであるが、古墳時代のある時期に、まずは北部九州に渡来し、その後、近畿・河内に移動した人物（勢力）ではないかと考えられている（「河内王朝」とも呼ばれているが、いわゆる騎馬民族的な文化や生活様式をもった扶余系、あるいはその同系とされる高句麗・百濟系？）？！

したがって、それが本当ならば、後の「継体」や「欽明」、あるいは「天智」や「天武」等は、すべてその子孫ということになり、日本の皇室は、まさに、そこに淵源があるということになる？！だが、いずれにしても、そうなると、当時の記紀編纂者達が目指していた、「天照大神」から連綿と続く「万世一系」の皇統譜づくり（の嘘！）が、そこで（も？）見破られてしまう？！多分そこで、彼らは、他ならぬ「応神」の系譜づくりに、大いに腐心したことになる？！

しかも、一方で、それに関わって、「記紀」には、もう一つ、どうしても書き記さなければならないことがあった？！それは、皇統譜の本源とも言える？「倭国・邪馬台国」あるいは、そこにおける女王「卑弥呼」や「台与」の存在である。繰り返しになるが、そのことは、その当時の宗主国（中国）の「魏志倭人伝」に厳然と書かれているからであり、それを黙殺することは出来なかった？！つまり、彼女らが直接の先祖ではなかったがために、やむなく、邪馬台国や女王の存在を、遠回しに匂わせることにはしたということである？！

実は、ここからが、私の閃き（妄想？）なのであるが、この時同時に、「応神」の虚像（すり替わり？）が必要となってきたということである？！何故なら、「応神」は、そこで遠回しに匂わせられた卑弥呼ないし台与（→神功皇后）と、その夫仲哀（本当は、住吉大神?!）の子として、その出自が示されていたからである！ということ、実際の女王（多分台与!）と誰かの子として、「応神」に成り代わる人物を、新たに創出しなければならなかった？！それが、他ならぬ「神武」ではなかったかということである？！

そして、それこそ荒唐無稽な話となるかもしれないが、卑弥呼・台与の時代

を神話にし、もう一つのカラクリとしての「アマテラス」と「スサノオ」の関係を創出し、彼（創出された神武！）を、彼女らの末裔（神裔）とした?!つまり、本当の3世紀前後において、アマテラス（卑弥呼・台与）の系統に、応神（→神武←渡来系百済?）の系譜をつなぎ入れ、一方のスサノオ系（これが真の皇統系譜=出雲系?）との一体化（融合）を図ったということである?!

けれども、それ自体は、ある意味では事実なのであり、その関係は、「神功皇后」と「住吉大神」の関係に昇華されたが、実はそれは、卑弥呼・台与（多分台与!）の「邪馬台国」と「出雲」の関係を示すものでもあった?!ここでは、卑弥呼・台与との対であるスサノオ・オオクニヌシが、実際に誰であったのかは特定できないが、「神武」を、それらの人物との間の子としたのである?!

しかし、実際の神武（応神の虚像ではない、実在した人物!）は、まさしく九州南部?から近畿・大和に移動（移住?）していた人物であり、だからこそ、その人物（実際の神武）の先祖としての、いわゆる「日向三代」の天孫降臨の地も、そこにしたのである?!

ということで、まずは「応神」に目をつけ、「神武」と、そのすり替わりのモデル「カモタケツヌミ」の関係（カラクリ?）を炙り出し、その関係から、「神功皇后」こと「息長足姫」と「天日矛（ツヌガアラシト?!）」の関係、そしてまた、その「天日矛（ツヌガアラシト?!）」と「事代主」や「住吉大神」、さらには「武内宿禰」との関係、そして最後には、百済（残国）王（兄王）こと「讚（滕?）」と「仁徳」の関係にまで、その類推（推理?）の幅（連鎖?）を広げる必要が出て来るのである?!

ただし、そうは言っても、「記紀」の最終作成者（黒幕?）は、「藤原氏（不比等）」である?!要は、とにかく藤原氏（不比等）は、自らの政権の正当性・正統性を、何としてでも示したかった!それが、『日本書紀』編纂（集大成←改竄／剽窃?）の目的でもあった!そして、それは、直接的には、「天武（系）」の正当性・正統性を、「天智（系）」の正当性・正統性に置き換えることであった!何故なら、それは、事実であったからであるが（「天智」は、まがりなりにも?九州倭国の継承者ではあった!）、そのプロセスが、あくどいものでもあった?!

そこで、彼らが採用した、「記紀」（直接には『日本書紀』）の編纂方針は、以下のようなものであった?!

1. 「国史」をもち、しかも長い歴史を有する国とする。

まずは、いわゆる「国史」をもち、しかも出来るだけ長い歴史を有する国とする。何故、そのようなことをしたのか?それは、国史（正史）の保有、しかもその長い歴史の存在は、政権（皇統）の正当性・正統性を保証するとされたからである。そのために、神話を創作し、はるか縄文時代?に遡って、当時の皇室の起源を設けた!そこに、いわゆる辛酉革命（1260年単位の、天命による

体制変革)の思想が導入された?!

2. いわゆる「大和王権」の創始者は、九州から来たとする。

次に、「大和王権」の創始者(「神武」)は、九州から来たとする。だが、その「神武の東征」と、その前に降臨したとされる「ニギハヤヒ」との関係をどう説明するかが、もう一つの重要な点であった?!これについては、もともと彼らの祖先が、そこ(大和)にいたのであれば、わざわざ「天孫降臨神話」を設けて、九州の高千穂というような僻地?を選ぶ必要はなかった?つまり、大和のどこかでもよかったわけである!

だが、そのようにはしなかった! 事實は、九州からの渡来であったからであるが、一方で、それまでの盟主的存在であった「出雲」勢力(本来の皇統?)の存在を仄めかしながら、それを、神話としてデフォルメさせ、その関係を明示しなかった?!

3. 天照大神を創出(捏造?)し、そこから続く、万世一系の天皇中心国家であるとする。

次が、「天照大神」を創出(捏造?)し、そこから続く、万世一系の天皇中心国家とするということであった。そこで問われるのが、そもそも神武元年(BC660年)を、何故、「推古」期(そこにも「辛酉」年あり!)から起算したかであるが、それは、彼女を最初の「女帝」とし、後の「持統」女帝の正当性・正統性を、その虚偽の作為から主張する意図があった?!そして、そこから、いわゆる「万世一系」の皇統譜を創り上げた?!

そこに、天武後の持統を天照大神に見立て、現政権の正統性・正当性を、その天照大神から賦与されているという虚構を創りたかったからであるが、他に例はない? 諡号の変更(大日本根子広野姫→高天原広野姫)は、そのことを如実に示している?!しかも、ここがミソ?であるが、それも含めて、夫の天武の系統が続いたように見せかけて、実は、父親の天智の系統に切り替えた、さらには、この持統女帝の登場によって、全く新たな王朝が始まったことを示した?!それが、神々の体系、天照大神の位置づけ等に反映されているわけである?!

4. 神話に、関係の氏族・人物等を投影させ、それらの関係あるいは正当性・正統性等を賦与する。

最後が、現政権(藤原氏)は、確かな後ろめたさがあつて、自家あるいは氏族・勢力関係の推移を、年代や史実を変えたり、入れ替えたり、あるいは外交等の文献等から移植したりしながら、自家及び友好関係にある氏族・勢力に一定の配慮をしながら示した?!つまり、彼らは、篡奪(乗っ取り?)者あるいは傍流であったということであり、したがって、できるだけ真実を隠し、ごまかし、偽造しようとしたということである!そして、それを、神話(神代)の形にしたということである?!

⑳ 改めて、「ヤマト建国」の真実は、どうなっていたのか？－その１－

最後に、ここでの「まとめ的なもの」ということになるが、記紀編纂者（勝利者？）側の「持統・藤原政権（藤原不比等）」の大きな作為は、自らが担いだ「持統」の「天照大神」への昇華と、父祖「鎌足」の顕彰（「中臣氏」の祖神「天児屋命」への昇華）、そして、その父祖ないしは本人の「高皇産霊神 or 思兼神」への昇華ということであった?!しかも、旧政権（天武王統）が続いたと見せて、その王統からの離脱（新王統の創出→天照大神／持統から続く「新王統」）を表出させていた?!したがって、その最大の注力は、それを、古代から続く「万世一系」の皇統譜として、いかに創り上げて（繋げて？）いくかであった?!

しかしながら、これも繰り返しになるが、その作為の最大のネック（弱点）は、先の「天武政権」、そしてまた、その基盤である「物部・蘇我政権（王朝?）」を、どのように位置づける（表現する）かであった?!何故なら、真実は、彼らを潰して?つくりあげたものでもあったからである?!

そこで、まずはそうした虚偽・造作の中で、全体としては、現在の政権（藤原政権!）を正統・正当化するような内容とし、それまでに実在した邪馬台国あるいは倭国全体の実態（実体?）、さらには出雲の先在、そして、それらと「倭国→日本国」の関係や各関係氏族（韓半島・渡来人を含む）との相克を可能な限り暈し、最終的には、蘇我氏・物部氏・尾張氏等を抹殺する一方で、至るところで、編纂当時の氏族・人物（の先祖等）が、どのようにそれに貢献したのかを暗示（賦与?）させるように、次のような、神話のストーリーを考案し、それを投影させたのでもある?!

すなわち、高天原での神生み・国生み（伊弉諾・伊弉冉等）／三貴子誕生（アマテラス・ツクヨミ・スサノオ）／アマテラスとスサノオの誓約（ウケヒ）／スサノオの狼藉とアマテラスの天の岩戸隠れ／スサノオの追放・出雲降臨・八岐大蛇退治／出雲の大国主の活躍と国譲り、最後が、天孫降臨（ニニギ）、日向三代（「海幸・山幸物語」等）、そして、神武東征ということである!

ちなみに、最後の、天孫降臨（ニニギ）はともかく、その先の「日向三代（「海幸・山幸物語」等）」の話は、人皇初代の「神武」へとつなぐ皇祖神の話であるが、もちろんそうした事実はなく（BC660年以前の話となるので当然ではあるが!）、それらを、より古くみせるためのフェイク話であることは間違いない?!

ただし、そのモチーフ（題材）は、当然あるわけであり、それは、「記紀」に示された古代史の大きな枠組み、すなわち「皇孫（ニニギ→天皇家）」が出会った（通婚あるいは共闘した）氏族・勢力との関係を、ある意味史実に即して表したものであろう?!それが、まずは「山祇やまつみ族」（→アタツ or アヒラツヒメ／コノハナサクヤヒメ／三島族＋隼人族?）、次が、「海神わたつみ族」（→トヨタマヒメ／ワニ族）、そして最後が、同じ「海神族」ではあるが、「カモ族」（→タマヨ

リヒメ)ということであった?!そう捉えると、実は、それ自体(元の話)は、かの「海神=ワタツミ=安曇族」との話ということにもなる?!

そこで、以上を踏まえて、改めて、「ヤマト建国」の真実はどうなっていたのか?であるが、まずは、2世紀末から3世紀初頭にかけて、奈良盆地の南東の三輪山麓の扇状地に、政治と宗教に特化された巨大都市が出現した。それが「纏向(遺跡)」であるが、その後、3世紀後半から4世紀にかけて、そこで出現(成就?)した「前方後円墳体制」が完成し、その埋葬形態が、各地に伝播していった!

一方で、そうした動きを誘った、北部九州の「倭国大乱」後の3世紀の前半頃、北部九州では、「伊都国」と組んだ?件の「邪馬台国」が台頭してきて、それまでの、「奴国」中心の倭国をまとめ上げていった(女王卑弥呼の共立!)?!そして、その「邪馬台国」は魏に遣使し、「親魏倭王」の称号も貰った!南に隣接する「狗奴国」との争いは絶えなかったものの、当分の間は、安泰だった?!

問題は、そこでの「出雲」との関係であるが(間違いなく?出雲勢力は北/東南部九州にも顔を出している?!←日田の「小迫辻原遺跡」!)、同じ3世紀の前半頃、先述のように、近畿大和に、突如として大規模な「祭政都市(纏向)」が出現する。ここを主導したのが、いわゆる吉備勢力(賀茂/和珥+物部族?)であり、彼らは、近江・東海・関東(→和珥氏、尾張氏等)、さらにまた丹波・丹後地方にまで、その版図を広げていった?!だが、そこでややこしいのは、彼らと、その出雲勢力との関係であり、さらにまた、「神武東征」にみる、南部九州勢力(曾於/日向→カモ族?)との関係なのである?!

いずれにしても、以上から言えることは、倭国→日本国の建国期においては、北部九州を中心とする倭国→邪馬台国連合の推移の中で、ある時から(ほとんど同時期?)吉備から出た?近畿・大和の勢力が、出雲や南部九州の勢力と手を結び、その後、北部九州との離反・融合を繰り返しながら、最終的には近畿大和の地で、まさに統一国家「日本国_{ヤマト}」が創り上げられたということである(ただし、これらは、記紀には直接には示されていない!やはり、そこには、絶対に明らかにできないことがあったということである!)?!

そこで、改めて浮上するのが、卑弥呼やトヨ(壱與 or 臺與)のことであるが(神話には、卑弥呼または卑弥呼+トヨが天照大神に投影されている?!)、二人の素性・関係性が、改めて問われる(「魏志」では、「トヨ」は13歳の「宗女」とされているが、実はこれが、『日本書紀』では、「神功皇后」に投影されている?!)?!それに関わっては、「彦火明_{ヒコホアカリ}命」ないしは「ニギハヤヒ」系統の、尾張氏・海部氏等の存在・関係性がある(特に、「海部氏」?)?!

すなわち、そこに、「初期ヤマト建国」ということが関わってくるが、その首都?「纏向」には、各地から大量の土器(外来系土器)が流れ込んでいた(内

訳は、東海 49%、山陰・北陸 17%、河内 10%、吉備 7%、関東 5%、近江 5%、西部瀬戸内 3%、播磨 3%、紀伊 1%、※北部九州系は、ごく僅か!）。しかも、墳墓自体も、各地（勢力）の寄せ集めだった?!

具体的には、前方後円墳の「葺石」は、山陰地方の「四隅突出型墳丘墓」の「貼石」、墳丘上に並べた「特殊器台形土器／特殊壺形土器」は「吉備」、「濠」は、近畿地方の「方形周溝墓」の「周溝」が発展したものの、豪華な副葬品は、「北部九州」からの影響（本当は、ここが重要?）、そういうことである（ちなみに、その纏向遺跡を代表する前方後円墳である「箸中（箸中山）古墳」は、3世紀半ば（→4世紀?）の造営とされている?!被葬者は、「吉備」からの?「倭迹迹日百襲姫命ヤマトトトビモモノヒメ」とされる?）?!

参考までに、その「倭迹迹日百襲姫命」／「前方後円墳」は「吉備」勢力で、初期ヤマト王権のシンボル、「前方後方墳」は「出雲」、あるいは「近江・東海」勢力（→尾張氏、息長氏等）のシンボル、といった具合であろうか?!ちなみに、前者は、前にも述べたように、「吉備」の「楯築墳丘墓（双方中円墳）」が原型であった!ただし、その基本は、多分「円墳」であろう?!

ということで、「円墳」が吉備（→物部氏?）、「方墳」が出雲（→蘇我氏）ということにもなっていくようであるが、それと、同じ山陰・出雲で盛行した「四隅突出型墳丘墓（方墳?）」がどうつながるのか?そしてまた、「前方後円墳」は、7世紀前半の「物部氏」の没落とともに、消滅していくというようにもあるが、それは、単なる偶然なのか?あるいは大いに関係があるのか?

もし、関係があるのならば、「前方後円墳」の出現は、まさに「物部氏」と直接つながっており（「物部氏」主導・中心で、その墳墓は出来上がったもの?!）、墳墓自体は、一番「吉備」の要素が強いとされているので（「高坏」「特殊器台」<→埴輪>等）、その物部氏は、「吉備」（そこもある時期からのものであり、それ以前に彼らは、どこからかやって来た?!）の出だということにもなる?!

そうなると、少なくとも初期ヤマト王権は、「吉備」（物部氏?）を中心として、出雲（→蘇我氏）、尾張氏等によって樹立されたのではないのか!いわゆる「大和三山」と言われるものがあるが、「畝傍山」…蘇我氏（出雲系）・男性・八尺瓊勾玉（忌部氏?）／「耳成山」…物部氏・女性・八咫鏡（石凝姥いしこりどめ命?）／「(天)香久山」…尾張氏・女性・草薙剣、というような関連付けもある?!これらは、この氏族達が、初期ヤマト王権を構成していたことを示すものと思われるが、だとしたら、何とも象徴的な三山構成ではないか?!

とにかく、こうした動きが、近畿大和を中心に創られていったことは事実であり、一方で、例の「魏志倭人伝」に示されている「倭国／邪馬台国」の状況と、それらが、どのような関係にあったのかということが、間違いなく?我が国古代史解明の最大の課題であることは言うまでもないのである!

㊦ 改めて、「ヤマト建国」の真実は、どうなっていたのか？－その２－

そこで、もちろん、その両者が連続しているものとするのが「邪馬台国（→倭国→日本国）近畿大和説」であり、一方で、近畿大和のそのことは認めながらも、あくまでも「倭国／邪馬台国」自体は「九州（北部九州）」にあり、その後裔国（本家筋？）が、少なくとも8世紀初頭までは存続したとするのが「邪馬台国（→倭国）九州説」なのである！

ちなみに、私自身は、後者の「邪馬台国（→倭国）九州説」を支持するものであるが、いずれにしても、その双方？の状況は、いわゆる2世紀後半の「倭国大乱」（180年前後に収束？）によって出来たことは間違いないであろう?!まさに、その「倭国大乱」が、その後の倭国全体のあり様を大きく決定したということであるが、その「邪馬台国所在地論争」が、この「倭国大乱」の実相によって、大きく規定されてくることは言うまでもないのである?!

何故なら、単なる所在地論争だけでは話にならないからである（そこに、状況出現の因果関係やその実態の解明が加わらないと、本当の真実究明には至れないということである!）!しかも、その「状況出現の因果関係やその実態の解明」は、これまでのところ、多くの人々の恣意（信念?否、学派?付度?）も手伝って、なかなか一筋縄ではいかなかったのである?!

ということで、以下、一応の史実解明材料（大方の同意が得られているもの）を活用して、ここで言う「状況出現の因果関係やその実態」を、改めて、より鮮明に炙り出していきたいのであるが、まずは、その「纏向（遺跡）」の状況から、話は組み立てられていかれなければならない?!何故なら、そこが、各地からの部族・勢力の結集（寄せ集め?）の場所であったからである!

つまり、問題は、何故、その時期に、そうした部族・勢力が、その地に集まったのかということであるが、それが、ここで言う「史実」の解明の鍵となると考えられるからである?!もちろん、これについては、立地の良さ（天然の要害?）が考えられるが、逆に、船での輸送・移動が一般的であった古代に、あのような奥深い内陸部（盆地）に、何故、人々が寄り集まる必要があったのか?しかも、言わば「全国各地」から!そこが、謎と言えれば謎なのである!

であれば、そこには、別の、ある特別な理由（結集の原因?）があったはずである（ただし、それは、結果的にそうなったのではあろうか?）!それは、第一に、そうすることによって、自ら（の部族・勢力）の生活の安定（保障?）、利益が得られる?!しかも、それは、それまでの北部九州の優位（とりわけ「鉄」の保有）から脱却出来る（もちろん、追い出された／締め出された悔しさや怨念もあった?）?!だから、一致団結して頑張ろう!そういうことではなかったか?!

すなわち、それは、最初は「稲作」であったろうし（奈良盆地は、当時は「湖」、または大半が「湿地帯」であり、したがって、その周囲を、人々は、「農耕」のため

に拓殖した→環濠集落→「唐古・鍵遺跡」)、次は(並行して?)、おそらく「鉦山関係」の人々が集まってきたのであろう(朱/丹生あるいは銅を求めて!)?!現に、盆地東南部及び反対側の伊勢湾内陸部(「中央構造線」沿い)には、朱/丹生あるいは銅を産出する大規模な「熱鉦床群」があり、朱/丹生や銅等の採掘が、盛んに行われていたようである(ちなみに、「伊勢」の重要性も、ここから垣間見られる?)?!

そして、ここが重要であるが、人々は、それぞれ大きな河川を利用して、その土地々を開拓・占有し、それぞれの流域に根拠地を形成した(だから、彼らは、基本的には「海洋民(海人族)」であった?)?!ちなみに、その河川、しかも大動脈となった大きな河川系とは、「淀川・木津川水系」、「大和川水系」、「紀ノ川水系」といったところである!ただし、いずれにしても、その土地々には、当然?在来(縄文系?)の人々が先住していたことではあろう?!

以上、言わば「全国各地」から人々が集住してきたことは、このような理由から説明できるのであるが、問題は、改めて、何故(直接のきっかけ?)、その時期(から?)、かの「三輪山山麓(纏向)」に巨大な祭政都市(太陽信仰/龍蛇神信仰?)が出現したのかである!これについては、前にも述べたように、「吉備」の勢力の進出が指摘されるのであるが、全体構図としては、彼らが、上記の各地の部族・勢力に呼びかけて、大きな勢力(王権?)を形づくっていたということである(しかも、「出雲」勢力を抱き込んで?否、同化して?)?!

もしそうであるとしたら、何故、「吉備(及び出雲)」勢力は、近畿(大和)に移動し、そして、それに呼応して、河内、近江、丹波、東海、北陸、山陰といった地域の諸部族・勢力が、その大和の地に集結したのかということが、残された?大いなる謎として浮かび上がってくる?!その大きな原因(背景)として考えられるのが、まさに「鉄(器)」の保有に関わる問題であったということである?!

ということで、もちろん、そのような原因(背景)は、詳細においては、多々異同もあるとは思われるが、少なくとも「邪馬台国所在地論争」には、そうした原因(背景)、及びその構図の解明に、まさに正面から立ち向かわなければならぬのではないのか!

要は、それは、いわゆる「北部九州説」には、直接の課題とはならないが(当然、間接的には関係はある!「東遷論」も、その一つである!)、一方の「近畿大和説」においては、そのことの、極めて整合的な解釈が必要不可欠となってくるということである!何故なら、(そこで言われる)「邪馬台国」は、決して所与の(最初からそこにあった)国ではないからである(もちろん、別の文脈では、「北部九州説」においても然りではあるが?)!

何故、そこだけ?あるいは、何故、そこからしか見ない(述べない)のか?

これまでの「邪馬台国所在地論争」には、そうした不満（疑問？）が残っていたわけであるが（特に、「畿内説」に？）、それを、何とかして超克していかなければいけないのである？！

であれば、ここでは、近畿・大和（「邪馬台国」ではない！）の状況（移り変わり）と、一方の北部九州（「邪馬台国（連合）」）の状況（移り変わり）が、例の「倭国大乱」と、どのような関係にあったのかということが、改めてクローズアップされてくると言うことは言うまでもない！何故なら、少なくとも、その出現は、双方共に、まさに、その「倭国大乱」によってもたらされたものと言えるからである？！

ちなみに、纏向遺跡等の「豪華な副葬品（→三種の神器？）」は北部九州の影響があったと考えられ、しかも、両者の関係（要素）は、それ以外にも、いたるところで見出されるのである（地域、氏族名等の一致等も含めて！）！したがって、その「倭国大乱」が、その後の「二つの倭国」を形成していったことは明白な事実であり、それらが、「記紀神話（神生み・国生み／誓約／国譲り／天孫降臨 等）」に昇華されてもいるとも考えられるのである？！

とにかく、多少堂々巡りとはなっているが、次なる課題は、改めて、以上のような移り変わり（状況出現の因果関係）を、一体どのように解明するかということになるが（単なる「東遷論」では説明できない？）、であるならば、その「倭国大乱」というものが、どういうものであったのか？ということが、改めてここでは問われてくる？！そして、ここで俄然注目されるのが、例の藤井耕一郎氏の論究なのである！

すなわち、その大乱は、吉備の「太陽／龍蛇信仰族（江南系部族？大物主／鴨族？）」がもたらしたというものであるが、彼らの移動／進出、すなわち当該部族・勢力の、東西に亘る（出雲を経由した？）集散離合のプロセスが、その大乱の顛末であったということである？！

ただし、それ自体は、よく考えてみると、「吉備」からのものではあったが、その先の原因（背景）は、実は、2世紀末の「倭国大乱」（北部九州）と考えられ、そこにおける「奴国」「伊都国」の変容（王族達の東への移動／逃亡？）、そして、近畿／出雲からの「多氏（神八井耳）」勢力の進出（出戻り？）によって、その様相は大きく変わっていった（かの「邪馬台国」も、まさにその文脈から？もちろん、そこには、後の「崇神」「応神」や「倭の五王」も大いに関わってくる？）？！

末尾に、こうした動き／変貌は、いわゆる「渡来系」の倭人（「海神」「山祇」→「江南系」「伽耶・新羅系」「百濟系」の三つに分けられる？）によって惹き起こされたものと言えるが、それ故に、この史実解明にあたっては、その渡来系の人々の、元居た国や土地のことも絡めて考察していかなければならない？！要するに、我が国内だけの枠組み・視点で見えてはいけないということである！